# ―謹んで英霊に捧ぐ－「南京虐殺」はなかった

# 森王 琢氏講演から

証言者　元福知山第二〇連隊第三大隊・大隊長代理
森王琢（もりおう・みがく）

以下は平成 4（1992）年 4 月に岡山国民文化懇談会（代表・三宅將之氏）で開かれた森王琢氏の講演記録（全 13 頁）の復刻である。

はしがき

終戦 50 周年を迎えても、「南京大虐殺」が論議されている。この事について発言した多くの人、最近では永野法相が一部のマスコミによる意図的な取り上げ報道で、近隣諸外国の圧力も加わって、発言の撤回と陳謝を求められ辞任した経緯はご存知の通りである。

この事実を本当に知り勇気を以て肯定否定する人がいない。私達も証明する資料の持ち合わせはなく、半信半疑の内に過ぎ去っているのが現状である。私も通算約１年半２回にわたる南京滞在があり、戦後も訪問している。親密になった中国人も居るが、そのような話を聞いた事も、詰問された事もない。この件について疑問視する１人である。報道機関が行う事実の報道は大切な使命であるとは言え、「自分も知らない事を、又自国の恥じになるような事を」調査もせずに、何故こんなに大きく取り上げて報道し、外国にへり下るのかと、苦汁りきっている１人でもある。こんな時、金陵部隊（旧南京駐在）の会合に出席の際、これに関する小冊子を貰った。証言講演者の内諾を受けてはいないが、この人が事実を皆さんに知ってもらいたいとの心境から、全国で講演されていることを知り、鳳戦友会の皆さんにも、講演内容をお知らせしようと考えた。以下が講演された内容である。

[講演者略歴]

１、明治 42 年生まれ。２、昭和 6 年陸軍士官学校卒業（43 期生）。３、昭和 12 年大尉、歩兵 20 連隊（福知山）中隊長として支那事変出征。４、少佐、歩兵第 76 連隊大隊長に転出以下略。

[講演のはじめに]（講演者及び筆者・森王氏）

私は評論家でも歴史学者でもないし、勿論右翼でもない。ただ南京攻略に参加した軍人の１人であるだけである。昭和 12 年 7 月蘆溝橋事件勃発後の 9 月、第 16 師団（京都）に動員下令、歩兵第 20 連隊中隊長として出征して最初北支に上陸、次いで師団は 11 月 17

日上海付近上陸、その後連日戦闘追撃を続け、12 月 9 日に南京の東北地区に進出した。途中連隊長が入院、大隊長戦死のため、私が大隊長職を代行して大隊を指揮し南京総攻撃に参加した。

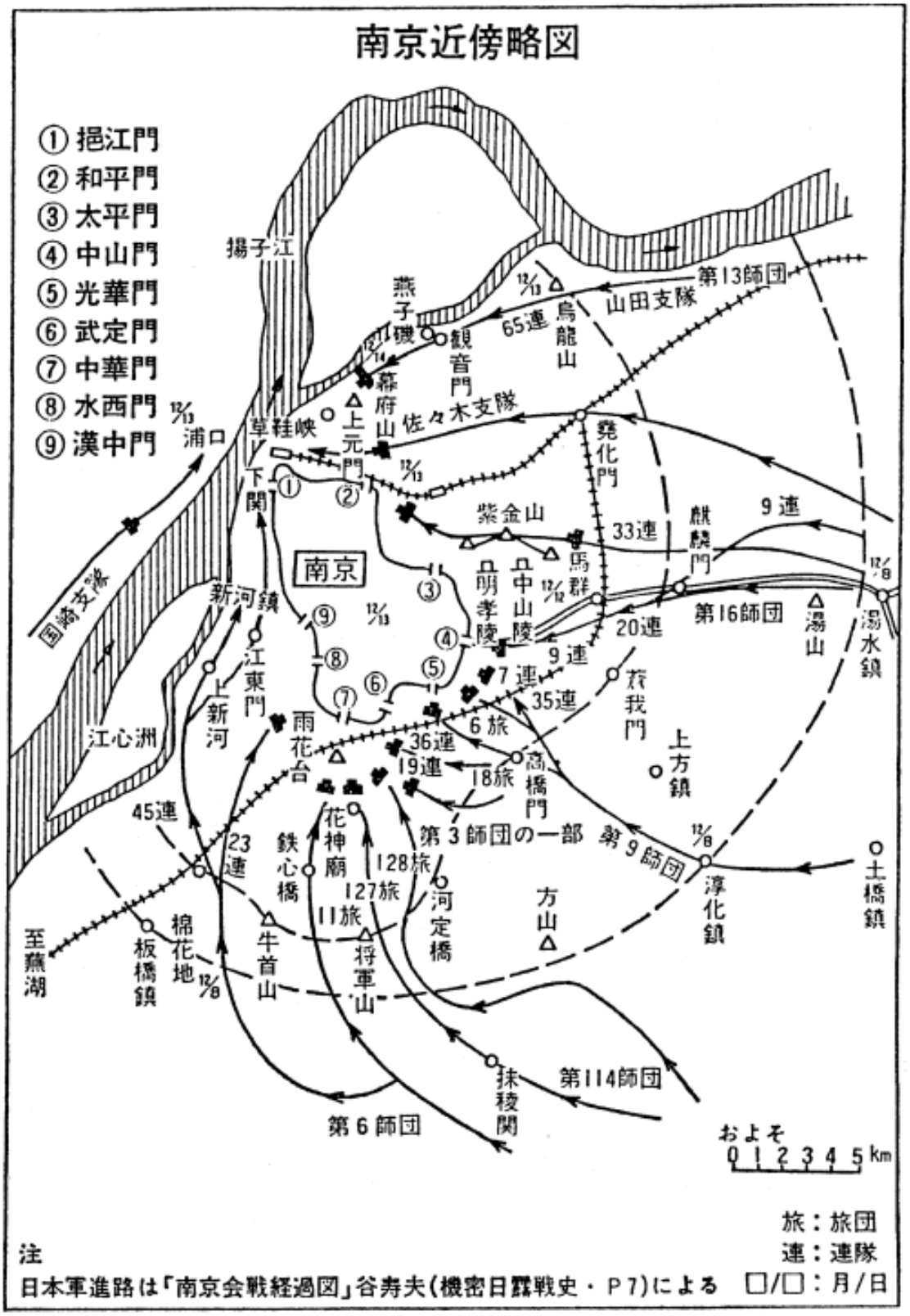
南京を 12 月 13 日完全占領し、翌年 1 月下旬迄約 1 ヶ月余り南京及びその近辺で警備に就いていた。所謂「南京大虐殺」があったと言われているその時その場所に居たわけで、当時の南京及びその付近の状況はこの目で見て、この身体で体験している者である。私が今から話すことで、「南京大虐殺」という議論が本当にどう言うものなのかを知って貰い、1 人でも多くに真相を伝え世間の誤った考えを正して貰いたいと思うのである。

当時第一戦に於いて部下と共に戦い、沢山の部下を戦死させた指揮官として、「南京大虐殺」というような暴論が如何にもまことしやかに伝えられ、しかもそれを大部分の日本人が些かも疑いをも持たずに信じている状態は、何としても我慢の出来ない事なのである。

共に戦った戦友、殊に日本の将来を信じて戦死して行った多くの戦友や部下に対して、根も葉もない濡れ衣が着せられている事は、私共生き残った者にとっては、黙って居ては申し訳けない。1 人でも多くの人に真実を知って頂く為に、自分が役に立つならば、どんなに遠く忙しくとも出掛けて行きたいと考えている。

１、南京総攻撃の概要（要図参照）

敵の首都南京を攻撃する為に各方面より進撃した各部隊は、12 月 10 日には次ページの要図のように南京を包囲していた。東からは私が所属していた京都の第 16 師団、南東からは金沢の第 9 師団、宇都宮の第 114 師団が真南から、熊本の第 6 師団はその西に、第 13 師団の山田支隊は紫金山の北側の揚子江に沿った地帯を前進、更に揚子江の向こう岸を国崎支隊（旅団長の指揮する第 5 師団福山第 41 連隊）と、南京は完全に包囲された。




注
日本軍進路は「南京会戦経過図」谷寿夫(機密日露戦史・P7)による

私は京都福知山第 20 連隊の第 3 大隊を指揮して中山門に向かって攻撃した。

当時の支那軍は、南京城外に第 36、51、58、87、88、101、112 の各師団の南京保衛軍という部隊が要塞を作って防備していた。

松井総司令官は 12 月 9 日飛行機で南京城内外にビラ（和平開城勧告文）を撒き、

「戦争をするにしのびないから、南京を明け渡すならば攻撃はしない。承諾するかしないかに就いては、12 月 10 日正午中山門城外に軍使を出せばそこで交渉する」と勧告したのであるが、敵からは全く回答なし。

流石に敵の首都であるだけに、もの凄い激戦になった。

私が指揮する大隊の正面 20 ㌔程先に「溝山（こうざん）」という小さな丘があり、12 月 10 日の正午に攻撃を開始して溝山に辿り着いたのは夕刻。敵の大部隊と相対したが時に紫金山方面から物凄い砲撃を受け全く動けない状態となる。溝山は雑木林であったが砲撃で丸裸になる程の猛攻を受けて損害が続出した。南京への総攻撃はこのような状況から始まり、11 日・12 日と全然動けない状態となった。12 日の夜半 11 時から 12 時頃迄と思うが、突然銃撃が激しくなった。私は敵が退却する前兆であると感じ、1 時間もすれば銃撃が止むだろうと考えていたら、案の定銃撃はピタリと止まった。直ぐに将校斥候を派遣した。斥候は午前 2 時過ぎに戻り「中山門まで敵なし」の報告を受けた。直ちに中山門に突入する決心を固め連隊長に報告し、第 3 大隊突入の承認を得ようとした。その報告を出すと入れ違いの様に、連隊本部から「第 3 大隊はその場に留まり引き続き警戒に任ぜよ、連隊は軍旗を奉じて、予備隊を以て中山門に突入する」という命令が伝達された。今まで 3 日間程随分苦戦を強いられ、今突入出来るという時にそこに留まっておれと言われた、その時の悔しさは一生涯忘れることが出来ないものとなった。連隊長が軍旗を先頭に中山門に突入、占領したのは 13 日の午前 4 時頃であった。

他の部隊も同様に、京都の 9 連隊は中山陵、明孝陵の周辺を攻撃。津の 33 連隊は紫金山を攻撃。佐々木支隊（旅団長の指揮する奈良第 38 連隊その他の砲兵部隊）は、紫金山の北側から南京最北の獅子山に向かい突進。第 9 師団は私の師団の左側を南東から光華門に突入。宇都宮 114 師団は雨花台から中華門に。第 6 師団は西側を北上攻撃。このような各部隊の編成で南京は 12 月 13 日に遂に陥落した。

２、「南京大虐殺」論は何故おきたか

これだけの大きな戦争をやったのである。全然不法な事件は無かったとは言えないだろうが、何十万、何百万という軍隊が命懸けで戦ったその後、どうして「大虐殺」などということが何故言われるようになったのか。

その第一は、戦後の東京裁判に於いて、検事側の証人の証言により始めて問題が起きたのである。支那人の他、当時南京城内に居た宣教師、医師、大学教授等が悪意ある証言を繰り返し、それが検証されずに採択されたことが第一の原因である。

第二は、東京裁判が進行するに従って、ＮＨＫラジオの「真相はこうだ」の番組で、尾

鰭を付けて放送された事も一因と思う。但しこれは、当時の占領政策として占領軍がＮＨＫの報道を統制し、監視していた事が考えられる（後に局の悔悟の発言を聞いた）。

第三は、新聞等のマスコミが「虐殺、虐殺」と盛んに書き立てた。それで一般の人が信ずるようになった。これもＮＨＫラジオ同様、統制による為であったのではとも考える。

その後報道統制が解けてからＮＨＫは余り言わなくなったが、新聞はその後も依然として書き立てていた。しかも「一流紙」と言われる朝日、毎日、読売、有力な地方紙迄もが何時迄も態度を改めず、一般の人はこれを信ずるようになってしまった。

３、東京裁判に於ける検事の証言

所謂「南京大虐殺」は東京裁判の場で始めて取り上げられたものである。ではその東京裁判はどうゆうものか。東京裁判の全般の詳しい記述はしないが、経過を追うと第一は裁判という形式を取った戦勝国による日本への報復である。第二は日本の「歴史観念の断罪」である。つまり日本の歴史を覆し、日本古来の道徳、宗教、家族制度の教育、日本に伝わる習慣等を全て悪とする発想からの決付けである。第三は、日本人に自虐観念を植えつけ、洗脳し、精神的な弱体化を計ろうとしたものであった。

また裁判の運営についても、①偽証罪を作らない裁判であったこと。②検事側の証言が明らかに偽証であっても無批判に採用され、弁護側の証言は多くは無視或いは抹殺されたこと。③公正であるべき判事が安易に検事に同調し、検事と全く同じ立場で運営されたこと。④弁護人が原爆投下の責任追及やソ連の不法参戦を追及しても、裁判長が「本裁判に関係なし」として発言を封じたこと。⑤判決は11名の全判事の合議によるべきにも拘らず、一部多数派の偏見的な意見のみにより判決を強行したこと。この様に明らかに不当と思われる事項も全てまかり通ったのである。

「南京大虐殺」に関する検事側証人の出鱈目な証言は、偽証罪の成立がないので殊更に被害を大きく話し、所謂白髪三千丈的証言がなされ、弁護人の反対尋問によってその嘘が暴露され、証言した証人や、それを採用した検事が恥をかき、失笑をかった事さえあった。

(1) アメリカ人牧師マギーの証言は、日本軍の殺人、強盗、強姦、放火等聞くに耐えない証言を 1 日半もかけて語っている。これに対しアメリカ人のブルックス弁護人が反対尋問したところ、事実を目撃したのは僅か２件のみで、ほとんどが噂の又聞き、憶測、甚だしきは自分勝手な想像に過ぎない事が暴露された証言さえもあった。

(2) その他、当時南京城内に居住していた牧師、南京大学の教授、医師、ジャーナリスト等、多くが悪意に満ちた証言をしている。

(3) 支那人の証言に至っては、全く白髪三千丈という誇張した証言で、宗教団体の紅卍字会副会長の許伝音という者の証言は、「自分が 4 万 3 千人の死体を埋葬した」と云い、又「34 万人が殺害され、４千軒の家屋が焼き払われた」とも言っている。

しかし南京城内には、平時は百万人位の人口があったようだが、大部分の人は戦禍を避

けて避難をしており、陥落当時は精々15 万人位といわれて居る。これが割合確実な数字のようだと思う。それを 34 万人殺害されたと言っている。又家を 4 千軒焼かれたと言うが、12 月 13 日に占領した南京に、私は 15 日に入りそれから約 1 ヶ月余り駐屯していたが、その間 1 件の火事も出ていない。

「哀声地に満ち死体山を築き、我が軍民悉く掃射を受け、死体揚子江を掩い、流水為に赤し」と支那人は当時の南京を表現しているが、さすがに支那は文章の国であると感心せざるを得ない。揚子江は南京よりも遥か上流の漢口迄 1 万トン級の船舶が航行でき、対岸の浦口等は霞んで見えない位大きく広い。その流水が「為に赤し」とは何をか言わんである。

(4) 崇善堂という慈善団体が、約 15 万～20 万の死体を埋葬したと証言している。一般に戦闘が終わると、作戦部隊は一応「戦場掃除」といって、敵味方の区別なく戦死者の遺体を片付けるのが軍事常識で、その時もこれを実施しているのに、そんなに多数の死体を埋葬したとはとても考えられない。と同時にそんなに多数の死体を埋葬するに、一体どんな大きな穴を、或いはどんなに沢山の穴を掘ればいいのだろうか、考えただけでも嘘という事が言える。

更に東京裁判の判決は、出鱈目な事や支離滅裂な点が多い。一例として、広田弘毅が軍事参議官の職にあったという事で絞首刑になっている。軍事参議官とは軍人で、しかも大将か元帥の位にある古参の人だけが就く職である。なのに外務大臣で文官であった広田氏がその職（軍事参議官）にあったとして処断されている。又陸軍大臣の荒木貞夫氏は、任命された事のない総理大臣の肩書きで判決されている。

またインドのパル判事は裁判中から「日本無罪論」を唱えていたが、一切無視されたばかりか、これを印刷する事も配布する事も禁止されている。かように東京裁判の不当性は、後になって裁判の総管轄権者であったマッカーサーでさえ、解任後帰国して大統領トルーマンに対し東京裁判は誤りであったと告白し、又首席検事であったキーナンも東京裁判の論告や判決は厳し過ぎたと言っている。その他英国国際法権威ハンキー卿、米連邦裁判所ダグラス判事、米国際法学者マイニヤ博士を始め、独・英等の国際法学者や哲学者等もこぞってその不当性を厳しく批判しており、今やそれ等は近年の国際法学界の共通の認識となっている。しかるに現在の日本の状態はどうだろう、半世紀経ち既に独立国であるにも拘らず、所謂進歩的と称せられる学者、文人、評論家、マスコミ等々の多くの人が今だに「東京裁判史観」の麻薬に犯された儘になっているかのように「東京裁判は正しかった」、知りもしない儘に「南京大虐殺はあったのだ」と吠えている。

## ４、虐殺論者とその嘘（1）

日本人で虐殺はあったと主張する人を一応「虐殺論者」と呼ぶ事にする。この中には新聞記者、学者、評論家という人達、それともう一つは戦争に行った兵隊、下士官、将校が

居る。そういう人達の虐殺論がいかに嘘であり出鱈目であるかを説明してみる。

① まず、当時の従軍記者の例をあげると、当時南京には、新聞各社の記者が百人以上居た。

イ、朝日新聞の今井正剛という記者が「南京城内の大量殺人」という本を書いている。大阪毎日（当時）の後藤記者が、

「あなたはとんでもない事を書いていますね」と正したところ、

今井記者は、「あれは興味本位で書いたのだ」と悪びれもなく語った。

そして誰もが「今井君は危険な前線に出て目で見てものを書く人ではなく、後方に居て人の話を聞いて記事にするのが上手であった」と批判している。

ロ、東京日々新聞の鈴木二郎という記者は、

「私は 12 月 12 日に中山門より入城した。後続部隊が次々に中山門で万歳をし、写真を撮っていた。中山門の上では盛んに捕虜が虐殺されていた」

と証言していた。作家の阿羅健一氏が、

「あなたは 12 月 12 日に中山門に入られたのですか。それは 13 日の間違いではありませんか」と尋ねたにも拘らず、

「いや、私は 12 日に入り、現実に捕虜が殺されるのを見た」と譲らなかった。

12 月 12 日には、私が前に書いているように、中山門正面約 2 ㌔手前の「溝山」の山頂に居た。双眼鏡で中山門の城壁がやっと見え敵兵がたむろして居た。一体何時になったら、あれを占領出来るだろうと考えていたことを、はっきり覚えている。そんな時に、１新聞記者がどうして中山門に入れたのか。

中山門の高さは約 10 ㍍、厚さ 20 ㌢の扉はぴたりと閉まっており、しかも門の内側には土嚢が高く積み上げられていた。13 日の未明、我が歩兵第 20 連隊が砲撃によって崩れた城壁をよじ登って占領した。私は 15 日になって中山門に入城したのだが、ここで捕虜が虐殺されたような形跡は全く無かった。要するに鈴木二郎の証言は全く出鱈目の嘘である。しかも、国の為と決死で戦った皇軍の悪口を言い何の得になるのだろうか。

ハ、東京日々新聞の浅海一男という記者が「百人斬り」という記事を書いている。

京都第 9 連隊の野田・向井という２人の少尉に、上官が「どちらが早く百人を斬れるか競争せよ、勝者には賞を与える」と命令し、２人が百人斬りを競ったというものであるが、こんなとんでもない事は全くの嘘である。

第一、軍隊が戦争の真っ最中に上官が将校にかかる競争を命じ、勝った方に賞をやろう等と言う事、又将校もそんな餌で釣られるような事は、軍隊の常識としてあり得ないことである。その時の上官であると言われる富山大隊長は唖然として、

「そんな馬鹿なことがあるものか」と、はっきり否定して憤慨している。更に野田少尉は大隊副官、向井少尉は大隊砲小隊長で、両人共部下が銃剣を以て敵陣に突入する歩兵の突撃部隊の指揮官ではない。そういう将校に敵陣に突入して百人斬りを命ずる馬鹿はいない。

このように作り話がまことしやかに書かれ、そのために両少尉は戦犯にされて処刑され

た。

② 次に、戦後に参戦者の手記、日記、インタビュー等から、盛んに「虐殺」を言っている記事は、その取材の仕方が全く誤っている場合が多い。一例を挙げてみると、

まず、第一に、取材する相手を、虐殺を証言したい人間しか選んでいない点である。虐殺を否定すると思われる人には取材していない。そればかりか、取材をすると何とかデッチあげてでも虐殺の方向に仕立てるという方法が取られている。場合によっては証言を意図的に歪曲し、時には反対に解釈し、証言を受けた人がそんなことは言ってない、と憤慨して抗議した例も沢山ある。又証言者が「中隊の軍紀は非常に厳正であった」等と語っても、そんな事は一切取り上げようとしていない。

自分の取材意図に合ってさえいれば、証言内容が明らかに嘘と判っても、その儘記事にしている。宮崎県の農家で現場写真と参戦者の日記が発見されたと、これを南京虐殺の決定的証拠として掲載した、朝日新聞の昭和 58 年 8 月 4 日の記事に対して、その写真は満州の馬賊の写真で、昭和初期に朝鮮で買ったものであると所有者が抗議した事例もある。

また森村誠一の「続・悪魔の飽食」に、日露戦争当時の伝染病による死体写真を今回の大戦による関東軍の虐殺写真と偽って掲載されたのを、読者の指摘抗議により暴かれた事は有名な話である。

この種のような記事に就いて、「そんな事は在り得ないことである」と反論されても、無視、認めず、言を左右にしてうやむやにするのが彼達の常套手段であった。

都城連隊関係者が、朝日新聞に対して名誉毀損の抗議訴訟を起こして朝日が敗訴した事件、京都新聞の無責任な記事に対する歩兵 20 連隊第 3 中隊の抗議に対する態度、又「平和の為の京都の戦争展」の朝日新聞の記事に対して私が抗議しているが全く無回答であった。これが新聞社の態度で、全く常識知らず礼儀知らずという他ない。

## ５、虐殺論者とその嘘（2）

偏向的な事後取材により「南京大虐殺」を盛んに主張する例を列挙してみると、

朝日新聞の本多勝一という記者が「中国の旅」という本を書いている。

彼は戦後の満州、支那に行って、日本人がどんな悪い事をしたかを支那人に取材して、これ等を全く無批判な鵜呑みの形で書いたものであるが、その中の南京関係の例を挙げてみよう。

イ、姜根福の証言。

日本軍は南京城の北の燕子磯で 10 万人くらいを機関銃で射殺した。紫金山で 2 千人を生き埋めにした。或いは軍用犬に中国人を襲わせ、その肉を食べさせた。南京城内で 20 万人を虐殺、死体を積み上げて石油をかけて焼いた。

ロ、伍長徳の証言。

南京戦の直後、日本兵に銃剣で肩を刺されたが逃げ、揚子江に飛び込んで、日が暮

れるまで水中に隠れていた。日本軍は逮捕した青年を高圧線にぶら下げて炙り殺し、工業用硝酸をかけて殺害した。

ハ、李秀英（女）の証言。

日本兵に強姦されそうになり抵抗、その銃剣を奪って格闘して追い払った。しかし37ヶ所も刺されて気絶していたのを、親族の者達に助けられた。

2千人を生き埋めにする為の労力とその穴の大きさは、どれ程のものであったのであろうか？　石油や工業用硝酸を、戦場で何時、何処で入手できたのか？　揚子江は確かに冬でも凍らないが、12月の河に飛び込み、首だけ出していて一体日が暮れる迄我慢出来るだろうか？　高圧線に、どうやって人間を吊り下げたのだろうか？　当時の日本兵は現役のバリバリで士気高い時期の人達で、女と格闘して銃剣を奪われ、尻尾を巻いて逃げ出すような情けない兵士がいるわけがない。37ヶ所も刺されて失神した者が蘇生するなどという事があり得るだろうか？　どれ1つ取ってみてもすぐ嘘だと判る事ばかり。それを本多勝一は「なるほど、尤もだ」と本にしている。「朝日新聞社の中には、本多君に対して良くない感情を持つ人が大勢居る」という事を同僚の記者が言っており、又石原慎太郎氏は平成3年2月の「文芸春秋」に、「朝日には本多という奇妙な性格の記者がいて、南京虐殺のことを書いている」とも書かれている。又当人の本多勝一は図々しくも、「日本の子弟に国際性を持たせるため、南京大虐殺の教育を徹底させる必要がある」と言っていた。私に言わせれば「売国奴、何を血迷っているか、妄言断じて許すべからず」と、怒りに駆られるのである。

「隠された連隊史」という本を、共産党機関紙「アカハタ」の下里正樹という記者が書いている。これには私の属していた福知山歩兵第20連隊の事が書かれている。下里正樹が元兵士に取材し、いわば誘導尋問して書いたものである。大体共産党の機関紙の記者が書いたものであるから、内容は読まずとも知れたものであるが、私の連隊の事を書いているものだから読んでみると、よくもこれだけ大嘘が書けたものだと思うくらいであった。

イ、「歩兵第20連隊では兵士が上官の指揮を批判し、命令に反抗し、将校はひたすら兵に迎合して兵の非行を黙認し、部隊内には下克上の空気が蔓延し、将校の権威も指導力も全く零であった」と書いている。

私は第20連隊の中隊長として、兵士の機嫌を取らねばならない等と思った事等一度もなかった。常に兵士と共に、お互いが信頼し合って戦い任務を処理してきた。　その結果半世紀経た今尚、当時の友が戦友会を毎年開き出席している。来月7日にも、この中隊が戦友会を京都府の綾部で開くが例年のごとく、「隊長殿、是非出席して下さい」との招待状を受け取っている。こんな事はお互いが信頼し合いながら弾雨の中を潜ってきた者なら誰も疑わない事である。

また、私が十数年前に大病で下関にて入院した事があるが、当時の部下の多くは京都府に居住しているが、誰言うとなく、「隊長殿がひどい病気だ」ということで、知らぬ間に多

額の見舞い金を送ってくれた。私はベッドで感激の涙にむせんだものである。将校と下士官・兵の心が離れていたなら、こんな友情に満ちたことはあり得ない。

ロ、「日露戦争の際、歩兵第 28 連隊（北海道旭川）の兵 2 千人が捕虜になり、戦後恥ずかしくて日本に帰らず、ハワイに移住した者もある」と書かれている。これも又、ものを知らずに書いたとしても、余りにも酷いものだ。1 個連隊は約 3 千人程度、そのうち 2 千人が捕虜になった等という事は有り得ないことだ。私に言わせれば、下里正樹は「私は嘘を書きました」と自分で白状しているようなもので、「天に向かって唾をする」とはこの事である。

学者の中にも、盛んに虐殺を主張する者がいる。何人も居るがその中の２～３の人を取りあげてみると、

イ、洞富雄　元早稲田大学教授

「南京大虐殺の証明」という著書の中には私の名前も載っている。その中で、便衣隊の兵隊を殺したのも虐殺だと書いている。しかし、戦時国際法で便衣隊は捕虜として認めておらず、従って捕虜としての権利は与えられていない。故に便衣隊を処刑するのは、捕虜の処刑には当たらない。

便衣隊は軍服を脱いで非戦闘員を装い、しかも武器を隠し持って、相手の油断をみて危害を加える者をいう。軍隊では非戦闘員を攻撃することは許されないので、非戦闘員を装った敵は危険極まりない存在である。従って戦時国際法では、便衣隊のような存在には正規の兵士が受けるべき権利を認めていないのである。

それを洞富雄氏は、

「便衣隊は軍人ではないのであるから、殊に戦争が終わって戦意が無くなっていたのであるからこれを殺すべきでない」と主張している。しかし現実に、「堂ノ脇という参謀」が便衣隊に襲われ、運転していた車の運転手が殺された事件がある。戦争の現実も、戦時国際法の規定の意味も知らない暴論と言わざるを得ない。

ロ、秦郁彦　拓殖大学教授

この人は中々良く調べて居るようだが、私共から見るとその調べ方が極めて粗雑である。

後に触れるが、曽根という元兵士がとんでもないことを書いているのを、もう少しよく調べれば判るのにこれを高く評価している。私はこの人には面識があるが、この評価は失敗である。

ハ、藤原彰　元一ツ橋大学教授

彼は陸軍士官学校卒業（第 55 期）という経歴で、終戦後大学に学び日本現代史、特に軍事史を専攻している。この人は虐殺論の学者グループを集め、南京事件調査研究会の現地調査団長として昭和 59 年 12 月、約 1 週間支那に行き現地で大変なご馳走に預かったようだ。戻って来るや「南京大虐殺」という報告書を書いてひたすら支那のお先棒担ぎに走っている。

６．参戦者の手記、日記など

実際に戦争に行った人達が、手記や日記を書く形で色々と虐殺に関し語っている。

まず第一に、日記や手記を書いて居たという事に疑問が残る。戦場で一般の兵士が日記を書けるかという疑いである。背嚢は必要最小限の携行品で一杯で、その中に何冊のノートを入れていたか。筆記具は鉛筆なのか、ペンなのか。当時はボールペンは無かった。

終日戦闘を続け、或いは土砂降りの雨の中を一日中行軍して、くたくたになって露営する事が多い。暗闇の中には蝋燭の灯りさえ無い。また敵と至近距離に対峙して夜を徹することもある。戦場の欲望には寝たい気持ちで一杯の事が多い。そんな中でどうして日記が付けられたか。又丹念に日記を書く力が残っていただろうか。それだけを考えても戦場で書いた日記だというのは、戦闘を経験してきた私等からみて素直に信用出来ない。

彼らの証言を幾つか挙げてみよう。

イ、中山重夫　　岩仲戦車隊の兵で、12 月 11 日に雨花台（南京城南側中華門外の台地）で、約 4 時間に亘って捕虜が虐殺されるのを見ていたと証言。静岡県の中学教諭森正孝という人の作った 8㍉映画を持ち歩いて、各地で講演をして廻っていた。

12 月 11 日は激戦の真最中、そんな中で捕虜を殺したりしている余裕等は絶対に無い。まして 4 時間余りもそれを見物していた等は考えられない出来事である。

特に、中山重夫が配属されていた戦車隊は、南京城東側の中山門攻撃に加わっていたが、11 日、12 日の戦闘状況は既に話した通りの状況下であった。この部隊に居た兵士が、南京城南側の雨花台で捕虜の虐殺を見るわけがない。なお、この間は直距離で約 5㌔、城壁沿いに周り道をすると約 8㌔位ある。このような大嘘も平気で語り廻る人物である。

ロ、曽根一夫　　豊橋の歩兵第 18 連隊の軍曹（分隊長）として従軍。「私記南京虐殺」３部作を発表、その中で蘇州河の戦闘についてを、

「11 月 7 日朝霧の中、工兵が作る人柱による橋上を敵弾の中を冒して走り、敵弾命中河中に転落」と書いている。これが全くの嘘である。

曽根一夫は豊橋歩兵第 18 連隊の下士官（軍曹）ではなく、名古屋の野砲第 3 連隊の初年兵であった事を、彼と同じ中隊（野砲 3、第 12 中隊）に居た戦友が証言しており、所属部隊も階級も全く出鱈目で、蘇州河の戦闘なんかに参加していない。

また第 18 連隊の中隊長、及部巷氏は、

「11 月 7 日は激しい風雨であった（朝霧などは出ていない）、蘇州河は水深が 2㍍以上あり、人柱等で通橋を作る事は不可能。さらに当時は敵弾が飛来するような状況下でなかったと語っている。この人も平気で嘘を言っている。

ハ、富沢孝夫　　海軍の暗号兵。

「12 月 11 日、松井軍司令官が虐殺を戒める暗号を傍受、解読した」と証言。

海軍の暗号兵が陸軍の無線が傍受できても、暗号を解読する事は技術的に出来ない。

更にもう 1 つは、12 月 11 日は攻撃の真っ最中であり、松井軍司令官は蘇州にて入院中で、南京には進出していない。これも平気な嘘物語である。

ニ、石川フミ

東北出身の日赤の看護婦で、病院船筑波丸に乗って揚子江を遡行し、12 月 27 日に南京に上陸している。上陸後中山陵（孫文の陵墓）を見物し、途中で「女、子供の死体が散乱しているのを見た」と語っている。

そんな頃にはもう死体が散乱して居たわけがない。私は何度も中山陵に行っているが、一体の死体も見ていない。何回も通った私が全然見ていないのに、たった一度しか行った事のない看護婦が、散乱した死体を見るわけがない。

ホ、東史郎

歩兵第 20 連隊第 3 中隊の上等兵。「わが南京プラトーン」という著書で随所に上官の悪口を書き、戦友の非行として虐殺、強盗、強姦を描写している。

又「7 千人の捕虜を各中隊に分配して殺害した」。

なお、「中隊長自ら斥候に行った」等という事も書いている。

彼は私の連隊の兵士。捕虜を各中隊に分配して殺害するというような事は有り得ない事だ。現に私の隊がそんな分配など受けた覚えはなく、話も聞いた事がない。

又どんな大切な激戦であろうとも、中隊長が約２百人の部下を置き去りにして指揮も取らず、斥候に行くなんて、そんな馬鹿な事はあり得ない。何処の部隊でも、中隊位のスケールで「中隊会」という戦友会を持っている。私の隊でも「中隊会」があり、毎年寄り集まっているが、そんな嘘を平気で書く男ですから、戦友会を除名されている。

また「東という兵士が倉庫に秘蔵していた手記を我々に資料として提供して呉れた」と発表した新聞があったが、彼と同じ町に住んでいる以前のかつての部下が、私に手紙を呉れて、「東の家に倉庫なんてあった事はない」と、はっきり否定して来ている。資料を与えた新聞社の記事によると、彼は自分の階級を「軍曹」と詐称して福岡で講演している。

ヘ、北山与

歩兵第 20 連隊第 3 機関銃中隊。

「12 月 13 日西山（前記の溝山の事をさす）麓で捕虜を火刑に処す」

「12 月 14 日機関銃隊は紫金山を掃討して約８百名の支那兵を武装解除後皆殺す」

と語り証言している。この人は私が第３大隊長代理として指揮した部隊の兵士である。そんな命令を出したことは無く、これほど重要な事を、直接の指揮官であった私が知らない筈がない。そんな嘘を朝日新聞は確認もせずに喜んで書いている。

彼は又、自分は日記を付けていたが、中隊長に検閲されるから、差し支えない事ばかり

を書いていたと言っているが、戦場の中隊長は兵隊の日記を点検する程暇でないし、又どの兵士が日記を書いているか判らない。

ト、上羽武一郎　第 16 師団衛生隊の担架兵。

「戦場で放火、殺人、切り捨て勝手たるべしの命令があったので毎夜民家に放火して、住民を炙り出して殺害した」と、メモに書きながら新聞のインタビューに答え、

「中山門攻撃の歩兵第 20 連隊は死傷者運搬のため、部落住民の中の青年約百名を徴用して、任務完了後虐殺」と語っている。　「放火、殺人、切り捨て勝手たるべし」等という馬鹿なことを言う指揮官がいるわけがない。また当時の戦場の住民の中に、百名もの青年（若者）がそこいらに居る等という常識外れな事を言っているのである。

チ、最近私が聞いた話で、京都に共産党をバックにした団体があるが、船橋照吉という男の日記が出た、これは虐殺の動かぬ証拠だと盛んに言い降らせていた。

週刊誌に出たその日誌なるものを私も子細に読んでみた。 輜重輸卒で京都の連隊に入ったそうだが、まるで自分 1 人で敵陣に突入し、勇戦奮闘したかのようなことが書いてあった。輜重輸卒が戦闘に参加したり、まして敵陣に突入するなんてことはない。

リ、太田久男という南京停泊場司令部勤務の少佐が、

「12 月 16、17、18 日に何万という死体を処理した」と書いている。

この人は戦後戦犯となり、満州の撫順収容所に収監されて、そこで書いたものらしい。

ところが同停泊場司令部に勤務していた梶谷という職員（曹長）の日記によると、太田少佐は 12 月 16、17、18 日には南京にいなかった。　この人は 12 月 25 日に、上海から初めて南京に転属して来た人である。

太田氏は戦犯収容所に収容されて、恐らくその様に書くよう強制された形跡が濃厚である。それを如何にも誠しやかに、虐殺の証拠としたようだ。

太田少佐の手記について、毎日新聞静岡支局の武田某という記者が広島に住んで居た畝本正巳氏（陸士 46 期。戦車隊中隊長として南京攻略戦に参加、偕行社編纂の「南京戦史」の編纂委員）のところに聴きに来た際、畝本氏は、

「そんな馬鹿な事は無い」と、梶谷（曹長）日記を見せて、太田少佐の手記の誤りである事を説明している。ところがその事が毎日新聞の記事になってしまうと、虐殺の動かぬ証拠になって終い、しかも少佐であった人の証言であり、間違いないとなってしまった。そして、畝本氏の訂正も、梶谷氏の日記も一切無視された。

このように私が話してきた事が「南京大虐殺」論の実態である。南京に虐殺があったという主張には、これだけ嘘が多いということが判って貰えれば、逆に虐殺は無かったのだという証拠になるのではと感ずる。「あった」という証明は簡単であるが、「なかった」という証明はなかなか難しい。ですから、「あった」という論議にこれだけ嘘が多い事を指摘

して、逆の証明にする以外の方法は無い。しかもその指摘は実際にその場に居た者、即ち私や戦友、隊員達が直接体験した真実によっての証明である。

７、虐殺論に対する反論

これ程多くの新聞記者、学者、評論家その他の人達が虐殺がありと言っているが、一方、「そんなことがあるものか」と反論する人もまた多い。先出の畝本正巳を始め、犬飼総一郎（陸士 48 期参謀）、田中正明（拓殖大学講師を経て評論家）、板倉由明（南京研究家）、谷口巌（南京問題研究家）等の諸氏は私も面識があり、この人達は著書をもって或いは投稿等により、虐殺論者に対し反論を続けている。

作家の阿羅健一氏の著書「聞き書 南京事件」（現在は絶版、小学館刊「南京事件日本人 48 人の証言」にて再販中）は、当時戦場にいたジャーナリストの人に集まって貰い、虐殺が有ったかどうかを尋ねて作成されたもので、殆どの記者が否定、「そんなことはなかった」と証言している。評論家として有名な細川隆元さんは元朝日新聞社の編集長だった方である。その細川さんも編集長時代に南京に派遣されていた記者を集め、南京虐殺事件の真否を聞いたところ「そんな事は無かった」とはっきり答えたと伝えている。要するに、物を正しく見て正しい事を言わんとする人は、南京の虐殺事件はなかったと明白に言って居る。一方、虐殺があったと論ずる人達は、世の中に迎合して居る人が多い様に感ずるのである。

８、戦場の真相

戦場はどうゆうものか、当時の日本軍と支那軍の実態はどうであったかを、実例を挙げながらお知らせしよう。

まず、当時の支那軍の兵隊の素質は悪く、日本の兵隊と全く異なる点があった。支那には昔から「良民不当兵」（良民は兵士にならない）という諺がある。

日本軍が虐殺したと言うが、まず虐殺をしでかしたのは支那兵の方である。その実例を挙げると、私達が上海付近に上陸後は殆ど連日戦闘、続いて追撃と敵と戦いながら南京に追って行った。従って私達の前には日本軍は居ない状態で戦闘を続けていた。ところが私達が或る部落或る町を占領すると、そこが既に破壊されており略奪されていた。民家が焼き払われていたのはおろか、甚だしきは住民が惨殺されていた。何故その様な事が起きるかと云うと、逃げる支那兵が略奪を働き、それを防ごうとした住民が殺されたのである。

支那軍は退却する時には「清野空室」と云って、家屋を焼き払い物を奪い去って、追撃してくる敵軍に、物資を利用させまいとする方法をとるのが常道になっていた。

昭和の始めに、「南京事件」「済南事件」というものが起きている。これは国民革命軍が北伐をした時に内乱が起き、在留の日本人や外国人が虐殺された事件である。また昭和 12 年 7 月 29 日に北京東南の通州で起きた通州事件がある。380 人居た日本人が支那の保安隊に殺された事件である。

支那には昔から「督戦隊」というものがあった事は有名である。後ろから味方の軍に鉄砲を向け、第一線を督励し、逃げようとする者を射殺するのである。実際に、南京の城外警備軍の第 87 師 88 師が総崩れになって城内に殺到しようとした時、城内警備の第 37 師が味方に向かって発砲して督戦していた。

また南京陥落の前、12 月 6 日には南京の各城門は内側から閉鎖され、城外陣地の守備隊は後退の道を絶たれ、自棄になって城外の部落で略奪暴行を働いたことが判っている。この様に、敗走する支那兵が自国の戦友や住民に暴虐を働いた例をみても、その素質は劣悪であり、性質は残虐極まりない事は明白である。この事は日本のように単民族でなく、各種の民族が入り混じり、隣の人を見れば泥棒と思えとする支那式感覚であろう。

次に、高級指揮官が不利と考えたら、さっさと逃げる事である。南京攻防戦不利だと悟るや、蒋介石は宋美齢を伴って 12 月 7 日飛行機で漢口に脱出、軍政部長の何応欽、参謀総長の白崇禧等が同行した。もっと極端なのは、南京の守備総司令官であった唐生智は、戦闘最中の 12 月 12 日には部下を放置して揚子江対岸に逃げてしまった。こんなわけから総兵力 6 万 5 千〜7 万は指揮官を失い暴徒化した。これで支那軍の実態が理解出来よう。これに対し、日本軍はどうかと云うと、先ず第一に国民の支援が厚く、兵士は郷土の名誉を担い、国家に対する忠誠心と自己の使命感を持っていた。又当時は連戦連勝の時期であったから、士気は極めて旺盛であり、指揮官もしっかりと部下を掌握して、軍紀厳正であった。

如何に軍紀が厳正であったかと云うことについて、自分の事で恐縮であるが、1 つの例として申し上げる。先ほど話したように非常に苦心し激戦を交え、12 月 12 日夜半、連日頑強に抵抗していた敵が総退却し始めた事を知り、今から城内に突入しようとしたまさの時に、連隊から私の大隊はそこに留まれとの命令を受け、私も部下も涙を呑んで止どまり、名誉の一番乗りの機会を見過ごす事になった。これが軍紀だと私は思う。いかに突入したくとも「止まれ」という上官の命令を受けたなら、歯を食いしばってでも、自分の部下を強くたしなめてでも、そこに留まる。これが日本軍の厳正な軍紀である。

戦場は極めてアブノーマルな場である。非常に悲惨なものがあり、非人道的な事も沢山ある。しかし全部が全部そんなような事ばかりではない。

これ又私自身の事になるが、ある部落を占領し宿営した時の事である。宿営の準備の第１は、先ず掃討して残敵が居ないことを確かめると共に、次いで食料に利用できるものを集める。その時に一人の兵が、

「隊長、こんなものが有りました」と笊に一杯の宝石とか貴金属を入れて持ってきた。私は、「そんなものを持ってきてどうするんだ。全部元の場所へ返しておけ。1 つでも盗んで身に付けていて、若し戦死でもしたらお前はとんでもない恥をかく事になるぞ」と戒めて一切手を付けさせなかった。勿論他の兵も誰一人そうゆう物を盗んだ者はいない。

また別の戦場である場所を占領した時のこと、住民は全部逃げて無人であったが、或る

兵隊が、「嬰児が１人取り残されている」と報告してきた。行ってみると可愛い嬰児が篭の中で無心に笑っていた。私達が明朝出発すれば住民は戻ってくるだろうが、今晩一晩この児に乳を飲ませてやる方法が無い。幸い隊内に従前支那で行商をして居た、支那語の非常に上手な八木という初年兵がいた。彼は今マレーシアに住んでいるが、その兵隊を付けて将校斥候を近くの部落に出し、よく事情を説明して乳の出る女を探してこいと命じた。

幸いに一人の女を連れて来たので、八木に通訳させて、

「私が隊長である。この赤ん坊が可哀相であるから、今晩一晩この児に乳をやって呉れ」と頼むと、女も納得して従ってくれた。

こう云うヒューマニズムな場面も戦場にはある。私のたった１回の体験であったが、こんな事は戦場では幾らでもあったと思う。かつて私は、グラフ雑誌で兵士が赤ん坊に水筒の水を飲ませている風景を見た事がある。戦場はアブノーマルであるが、全くの殺伐な場面だけではない。こんな事を何故報道記者が報ぜないのか。戦争をしたくないと云う心は、一般の人よりも戦争を体験した者が一番切実に感じている筈である。瞬間々々、死に直面した状態を続けているのであるからだ。しかし、こうゆうモラルやヒューマニズムは一切報道せず、殊更に悪い面を誇張するばかりか、有りもしない嘘まで書いて、「それが果たして本当に戦争を防止する事になるだろうか」と感じる。

終わりに

結論として、南京において不法行為は 1 つも無かったとは言わないが、しかし日本の兵隊（軍隊）が極悪非道な事ばかりをしておったと言うのは、色々実例を挙げて説明して来たように全くの嘘である。ですから一般的に言って「南京大虐殺」は無かったと言って良いと私は確信する。

にも拘らず、日本の大部分の人が何の疑いも持たず「南京大虐殺」を信じ、政治家が臆面もなく「悪いことを致しました」と土下座外交をしている実情を見て、これが独立国の外交かと情けなく感ずる。このような態度は徒に外国の侮りを招くだけである。その証拠に、金丸氏が北朝鮮に行った際、「戦後 45 年間の賠償」をと無礼極まる要求をされた。日本は北朝鮮と戦争をしたことは一度も無い。賠償しなければならない理由は無い。

或いは歴代の総理大臣が、何故靖国神社に参拝出来ないのだろうか。靖国神社に参拝しないで、アメリカのアーリントン墓地には参拝して花輪を献じ、朝鮮に行っても伊藤博文を暗殺した安重根や昭和天皇に爆弾を投じた不逞の徒を国士として祀っている忠魂碑にひざまずく様は正視するに堪えない屈辱である。このような外交姿勢で良いのだろうかと考える。

またソビエトは、友好条約を一方的に破棄し、不法にも北方領土を侵略強奪した。その返還には誠意の片鱗も示さないで、しかも日本に経済援助を当然の事のように要求している。これも日本が侮られている証拠だ。

日本は独立国であり、我々は独立国の国民であるということを、もっと真剣に考えよう

ではないか。この輝かしい伝統を持つ日本の歴史を後世にきちんと伝えていくのが我々の務めである。その為には、日本人の一人一人が日本の姿を正しく見詰め、日本の国を大切にする事である。即ち国旗日の丸、国歌君が代を誇りに持って大切にする事である。

最近の教科書には「南京における惨殺」という記事が平気で書かれている。何故もっと真剣に調査をして呉れないかと思う。文部省は何を考えているのか。へり下る姿勢でそういう事を書き青少年を教育するから、独立国のプライドが失われ徒にエコノミック・アニマル的国民に堕落する危険性がでるのではと心配する。

最後に、レーニンはその著書「国家と革命」の中で、「青少年をして祖国の前途に絶望せしめる事が、革命精神養成の最良の道である」と書いている。

現在の日本はまさにこの危機に直面して居るのではなかろうか。現在の我々には、この大切な日本を後世に立派に申し継がなければならない使命がある。そして青少年が日本の国に対する誇りを持てるように育成しなければならないとも考える。我々がそれを実行しなければ、誰がそれをやって呉れるかである。夫々自分の家庭で子供に日本の国の大事さ、良さ、誇りを持たせる努力をしなければならない。教育の場にある人も、その職場でこれらをやって貰いたい。

質問と答え

[問]　戦場で兵士が日記や手記を綴る事は許されたか、軍の秘密保持で禁止は無かったか。

[答]　禁止はない。しかし背嚢の中にノートや筆記具等を入れる余裕はなかった。戦場では克明に文章を綴る余裕は恐らくなかったと思う。戦場の実態を考えると、「日記が出た」「手記が出た」と言い、これを虐殺の証拠だと言う事の多くは嘘で、後から記憶を辿り、しかもジャーナリストの要望に迎合する記述ではと思う。兵隊が軍の配備等を書いているがそんな事は判らない筈。大隊長クラスの私でさえ、連隊の全部、まして師団の全部がどうか等は判らない。一兵士が隣の連隊がどうした等と、まるで軍司令官か参謀のようなことを日記に書いているのは嘘と云うしかない。

[問]「南京大虐殺」については、米英の新聞報道で見たことが無い。米英の新聞記者も当時は南京に居た筈で、事実なら報道されない筈がないと思うが。

[答]　米英の新聞記者も居た。私が知る範囲ではそういう記事が載ったことは聞いていない。

[問] 中共側の歴史書に、日本軍の「三光作戦」という言葉が屢々(しばしば)出ている。殺光（みな殺し)、搶光（略奪しつくす)、焼光（焼きつくす）という作戦命令は実際にあったか。日本の本でも見たことのある言葉だが。

[答] 軍の命令でそんな事が出た事は私の記憶ではない。また絶対に有り得ない事だと思う。支那軍が退却する際に「清野空室」という行動はあった。城内に入った際にこの行動はよく見かけた。「三光作戦」も支那側で言い出した言葉ではないか。日本軍の指導に「殺さなければ殺される場合のみ殺せ」というものはある。私もこれは部下に厳格に守らせてきた。住民は勿論敵兵であっても無抵抗の者を殺す事はなかった。

付記

[便衣隊]　便衣隊は陸戦法規違反である。戦時国際法によると、「便衣兵は交戦資格を有しないもの」とされている。交戦資格を有しない者が軍事行動に従事して敵に捕えられた際、捕虜としての待遇は与えられず、戦時法で重犯罪人としての処罰を受ける。戦時重犯罪者は死刑又は死刑に近い重罪に処せられる事を、戦時公法が認める一般通例である。

（新訂国際法）（原文ママ）（信夫淳平博士著「上海戦と国際法」125 ページ）